

東亜建設工業株式会社
執行役員常務東京支店長

御沓 英剛 さん

みくつ・ひでたか

1988年大分工業高等専門学校土木学科卒、東亜建設工業入社。大阪支店、横浜支店、東京支店、本社勤務を経て2022年4月に執行役員東京支店長。4月から執行役員常務。大分県出身、57歳。



あの頃、 思い出の現場

「平成6年度 横浜港南本牧地区護岸(防波)築造工事」

若い仲間と乗り越えた 初の ケーソン工事

大分工業高等専門学校を卒業して、最初の赴任地大阪支店を経て、その後25年間在籍することになる横浜支店に赴任したのが1991年です。最初は、民間の棧橋工事などを担当し、3年後の1994年か

ら南本牧ふ頭埋立及びコンテナターミナル整備事業(以下、南本牧事業)に携わるようになりました。27歳の時でした。

当時の運輸省(現・国土交通省)が発注した工事に初めて監理技術者として配属されました。現場代理人であった四十代の上司の下に、私を含めてまだ二十代の若手職員が集められました。

工事は、水深およそ40mの海底に基礎捨石で天端高-15mの基礎マウンドを形成し、8函のケーソンを据え付けて防波護岸とする内容です。川



当時の現場の様子

崎の東扇島防波堤の背後に仮置きされていた約3,300tのケーソンを1函ずつ約5時間かけて浮上曳航し、現場に据え付けていきました。

築造する防波護岸は、陸上から約1.5kmの沖合になります。南本牧の沖合は潮流が速く、東寄りの風が吹くと時化(しけ)るなど厳しい環境でした。潜水作業も慎重に行わなければなりませんでした。

通常、ケーソンを水平に据え付けるため、基礎マウンドの天端は水平に均しますが、この工事はケーソン据え付け後にみられる陸地側への傾斜、埋立に伴う沈下を考慮して少し傾斜を付けて均すという初の取り組みを行うものであり、天端幅17.8mの均し幅の中で、前側が-15cm、後ろ側が+15cmと30cmの勾配をつけるものでした。角度にすると約1度になりますが、厳しい環境下で正確な位置を出すことには大変苦労しました。

平面位置出しは、勾配が付くため位置がずれると水深が違ってきます。そのため、潮流の影響を受けない潮止まりの時間帯に何度も何度も位置だしを行いました。そして基礎マウンドの高さの測量は、当時まだ珍しかった水中水準測量装置を南本牧事業で初めて使用しました。これまで経験したことのない測量方法になります。いきなり本番の作業をしてもうまくいかないだろうということで、潜水土の方と一緒に陸上での訓練を繰り返しました。

この工事に用いたケーソンは、消波効果があるスリットケーソンでした。曳航時にスリット部から海水が入ると沈没してしまいます。止水蓋の取り付け方法を何度も確認し、止水性を細かくチェッ

クしました。曳航中に水が漏れないか、浅瀬に座礁しないかなど心配ばかりしていました。

苦勞の末に現場に到着したケーソンを据え付ける時も試行錯誤の連続でした。ケーソンの誘導は400mほど離れた測量櫓(やぐら)から行いました。1函目のケーソンを精度良く据え付けようと思って取り組んでいたのですが、潮流もあって位置がなかなか定まらずに時間がかかっていました。その時に上司から「1函目は仮置きにして、2函目の据え付けに使用した後に正規の位置を出して据え付けよう」という提案がありました。初めてケーソン

工事を行う若手の私たちは、1函ずつ正確に据え付けることばかり考えていましたので、目からうろこが落ちる思いでした。

また、ケーソン工事を初めて行う私たちは、上司にお願いして工事の前に、同じ神奈川県内で行われている別のケーソン据え付け作業を見学していました。ケーソンの規模は小さかったと思いますが、その現場では簡単そうに作業が行われているように見えたので、「これなら大丈夫だろう」と高をくくっていましたが、実際にはわからないことも多く、みんなで一つ一つの作業を確認しながら課題を乗り越えていきました。大切なのは一人で悩みを抱え込まず、共有して取り組むことであると現場で学びました。

工事の完了検査で発注者の方から「滑走路のように出来栄がきれいに仕上がっているね」と言っていた時はそれまでの苦勞が吹き飛び、みんなで喜んだことを今も覚えています。その後も長く南本牧事業に従事しましたが、多くの挑戦に携わることもでき、思い出の深い事業となっています。



社員旅行で同僚たちと(本人は前列中央)